
ワッフルとホックとスカートと

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワッフルとホックとスカートと

【Zコード】

Z8039Z

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

日菜子は恋する女の子。ダイエットにも必死です。でも、ちょっとだけ自分に「褒美を……」そんなお話です。教訓、その一口が命取り。

ある日の午後のことだ。

「いらっしゃいました」

午後のお茶の時間、日菜子は席を立った。

主君の退室を待つて、女官達が無駄のない動きで後かたづけに動く。

「あらっ？」

女官の一人が、テーブルの上を見て手を止めた。

「何か？」

「あ、橘様。その、またお茶菓子をお残しに」

橘がテーブルの上を見ると、確かにお茶菓子が残っていた。

「普段でしたら、残さずお召し上がりになるはずなのですが、このところ

「膳部には報告しておきましたよ」

「このお菓子も、九州の名店から取り寄せたと聞きましたが

「お口に合わなければ、全て不可、そうですね？」

「ううう……」

私室に戻った日菜子は、ため息をついてベッドに腰を下ろした。本当は食べたかった。

この一週間、ケーキもパフェも大福も、あらゆるお茶菓子を半分だけにしている。

ワッフルまでだ。

「食べたいよ……でも……」

日菜子が視線を向けた先。

そこには平べったい物体が置かれていた。

それこそが、近頃日菜子を悩ます厄介な存在。

「ううう……」

日菜子は大きくため息をつくと、恐る恐るその物体の側に近づいた後、

「えいっ！」

思い切ってその物体に乗った。

ピピピピピ

電子音がして、数値が出る。

「……」

日菜子はその数値に田を見張った。

「ゴシゴシ

田をこすりつてもう一度見る。

「……やつた

「ほれるような笑顔で日菜子は叫んだ。

「やつたあ！」

その物体、つまり、体重計から飛び降りた日菜子は、驚くタマを抱き上げ、くるくるとダンスを始めた。

「いやー！にやああああつ！！」

タマの悲鳴に気つくこともなく、日菜子は踊り続け、そして

ポイッ

タマをベッドへ放り投げた。

「努力した甲斐がありました！」

そう微笑むなり、日菜子は部屋から消えた。

ドアが閉まつてすぐのことだ。

「タマさん」

誰もいなくなつた部屋の中で、そんな声が聞こえた。いつの間にか、部屋には一人の少女の姿。宙に浮くその少女は、真由といふ。

日菜子の唯一の親友にして、死後、糸余曲折の末、日菜子の守護

靈の一人となつた少女がタマに語りかけた。

「あれ、いいんですか？」

「僕達に止めることは出来ないよ」

タマはベッドの上で伸びをしながら、人間の言葉でそう答えた。

「でもお。あれって痩せたとはいいませんよ？本当、日菜子つてそそつかしいというか、単にズレてるつていうか」

「え？ そうなの？」

「普通、500グラムでダイエット成功なんていわないです」

「ふんふんふう～ん」

スキップしながら日菜子は街を歩いていた。

ダイエットに成功したせいだろう。体が軽い。

「ガマンしたんだから、やっぱり、『」褒美ですね

日菜子が向かつた先、

そこは行列の出来るワッフル専門店。

品数は少ないが、熟練のワッフル職人の手によるワッフルは女子達に大人気。持ち帰りもあるが、やはり店内で出来たてを食べるのが一番美味しい。

雑誌にも度々取り上げられている話題の名店だ。

「あのワッフルも捨てがたいですけど、やっぱりこのお店にはかないません」

待つこと30分。

やつと席が空いた。

相席だつたが、文句を言える立場ではない。

「失礼いたします」

先に座っていた少女に一礼した後、日菜子は席に座った。

「いえ。こちらこそ」

少女も返礼する。

「ご注文は？」

「アップルシナモンとバー／＼」

「かしこまりました」

ふと、視線を感じた日菜子が見た先には向かいの席に座る少女がいた。

「あの？」

「あ、ごめんなさい」

少女は軽く手を合わせて言った。

「そつちにしておけばよかつたかなあつて思つて」

「失礼ですけど、何をご注文に？」

「あ、ふつうのフレーンです」

「あれも美味しいですよ？」

「そうなんですね」

気が付くと、二人はワッフルを食べながらワッフル談義に花を咲かせていた。

やれ、どのお店が美味しいとか、

どこの通信販売のワッフルはまずかつたとか。

「そういえば」

少女が日菜子にそう言ったのは、何回目のワッフル追加注文の後だつたろう。

「名前、まだ聞いていませんでしたね」

「あ、私、ですか？」

「はい」

「えっと、ひ、比奈です。比奈と呼んでください。あなたは？」

「あ、綾です」

「でも、あなたどこかで見た気がするんですけど」

日菜子は首を傾げながら少女の顔を見た。

お嬢様然とした顔立ちに優しげな笑顔。

学校にいたら才色兼備の優等生という感じだらう。

髪をアップにまとめ上げているせいで随分大人びて見えるが、それでも歳はそう離れてはいないはずだ。

日菜子はこの顔をどこかで見た気がしてならない。

だが、どうしても思い出せなかつた。

「え？ そ、そうですか？」

綾と名乗る少女があせるのも気になる。

「ええ。……どこかでお会いしました？」

「い、いえ？ でも」

少女の言葉に、日菜子は度肝を抜かれた。

「私も、どこかであなたを見た気がするんです」

「えつ？」

今度は日菜子があせる番だ。

まずい。

変装は自信がある。

髪型はしつかり変えてある。

どうしてばれた？

「でも、どうしても思い出せないんです」

「き、気のせいです」

日菜子は焦る心を抑えながら言った。

「ほら、他人のそら似つて」

「ああ。そうですね……あなたみたいなカワイイ子なら、きっと

芸能人かな」

「ふふふ。それは私のセリフです」

「やだ。比奈さんだつて芸能人顔負けですよ？ オト「の子だつたら放つておかないです」

「綾さんには負けます。本当は、男の子と食べに来たかったんじやないですか？」

「それが」

綾はため息をつきながら言った。

「実はちょっとダイエットしてる間に、つい彼に言ひ切やつたん

です。ワッフルなんて興味ないって

「何故、そんなウソを？」

「そう言わなければ、自分の意志が崩れそうで」

「ふうん？ それで？ ダイエットには成功したのですか？」

「はい！」

綾はうれしそうに答えた。

「予定より500グラム多くて一キロ」

「あ、私は500グラム」

「痩せましたね」

「お互に」

違う。本当はやつ突っ込むべき所だろ？

しかし、一人にあるのは、成功者の喜びをかみしめ、互いをたたえ合う意志だけだ。

「食べるものを食べないのって、辛いですよね」

「本当に、あ。綾さん？ ワッフルとお茶、おかわりいかがですか」「もらいます。すみません。プレーン3つとアールグレイを」「私はチョコとメープル、シナモンティ」

「くすっ。それにしても」

「なんですか？」

「綾さんのダイエットの目的って、男の子のためですか？」

「そ、そういう比奈さんは？」

「ま、まあ……それもあります」

「やつぱり、かわいいって言われたいですものね」

「そうですね。ね？ 綾さんは、その男の子とおつきあいしているのですか？」

「え？ ええ……まあ。比奈さんにはいるんですか？」

「私？」

日菜子は、自分を指した後、モジモジしながら言った。

「で、デートは2回しました」

「今度、ヴァレンタインですけど、もう準備されたんですか？」

「ヴァレンタイン?」

「ええ。チョコレート」

「そ、そういうふう忙しくて忘れていました」

「私も買いに行こうかなって思つてるんです。この後、一緒にどうですか?」

1時間後、

日菜子達はデパートの特設コーナーにいた。

女の子にとつては、クリスマスと並ぶ決戦の日とあって、チョコを買い求める子達で「コーナーはあふれかえつていた。

「手作りって手もあるんですけど」

綾ははにかみながら言つた。

「彼、料理が上手だから、きっと私より美味しいの作っちゃうし」「綾さんのことが好きな相手なら、きっと何でも喜んで食べてくれます」

「比奈さんの彼のことですよ」

笑いながらチョコを選ぶ二人。

特級の美少女一人がチョコを選ぶ光景は、はつきり目立つ。

チョココーナーを通り過ぎるオトコ達は、

こんな子達にチョコをもらいてえ!とか、

彼女達にチョコをもらう男なんて呪われちまえ!と心中で妄想したり毒づいたり。

一緒にチョコを選ぶ女の子達は、

こんなのがライバルなんて絶対イヤー!とか、
カレにあげよくなんてしてないわよね!?

と不快や警戒感で心を乱したり。

とにかく、周囲は落ち着かない。

一人がレジに並び、出でいった途端、コーナーのあちこちからため息が漏れた。

「じゃ、私、これで」

公園まで歩いた所で、そう言ったのは田菜子だ。

「そうですか？もう少し一緒にいたいのですが」「綾は残念そうに言つたが、田菜子はそれに答えた。

「時間が時間ですから」

「そうですね」

いいつつ、二人は離れようとしない。

互いの顔を見ながら紡ぐ言葉を探している。

「不思議ですね」

やつとのことでほつとそつと言えたのは田菜子だ。

「なんだか、あなたとは本当に心を許せる気がしてなりません」

「私もです。　　また、会えますか？」

「そうですね」

田菜子は少し考えてから、イタズラっぽく言つた。

「運命がそうしりつていうなら」

「じゃ、きっと会えます」

綾は笑つて言つた。

「私達、きっといいお友達ですから」

「そうですね。じゃ、綾さん」

「はい。また会いましょう」

一礼の後、駆け出す田菜子に手を振る綾。

「綾さん！」

少し離れた所で、田菜子は言った

「今度会つときは、本名を教えてくださいねーー？」

「比奈さんもー！」

一人は、笑いながら手を振り合い、そして別れた。

翌日の明光学園。

「へえ？ あのお店に行つたんだあ 「

お皿、リングだけをかじる綾乃に驚いた声をあげたのは美奈子だ。

「……はい」

「いいなあ。 あのお店、高いからなかなか行けないのよ」

「いやあ。 それにしては綾乃ちゃん、冴えないねえ。 そんなにおいしくなかつたの？」

南雲手作りの弁当を頬張る未亜が心配そうに訊ねた。

「おいしかつたです」

「お友達も出来たんでしょう？」

「……はい」

「どうしたの？瀬戸さん」

美奈子も不思議そうに訊ねた。

「まるでお通夜にいるみたい」

そう。

美奈子の言ひとおり、アイドルらしからぬ辛氣くさい顔をしているのは、瀬戸綾乃だ。

「悩みがあるなら聞いてあげるよ？ 私達だって友達だし」

「……」

「ふんふん。え？」

未亜が綾乃の口元に耳を近づけた。

「ワッフル食べ過ぎて、ホックが飛んだ？」

「未亜ちゃん！」

赤面した綾乃が怒鳴り声をあげた。

一方、同じ頃、高中。

「……」

日菜子は、呆然として立ちつくしていた。

理由がわからない。

いや、わかりたくない。

この服は、水瀬とのデートのために設えたとつておきだ。ただ、スカートが少しきつかったので、思い切ってダイエットしたのに。

ヴァレンタインは忘れていたが、デートの時、また水瀬に抱きしめられることがあったら、運動不足のお腹なんて思われたくない。その一心だった。

努力はした。

それなのに、何故？

「あら？ 日菜子？」

虚ろな目で日菜子が見た先。

そこには、姉の麗菜の姿があった。

「どうしたの？ スカート落として」

「……」

「あ、ホックが飛んだ？」

数日後のことだ。

「へんなんだ」

ルシフェルに首を傾げながら相談するのは水瀬だ。

「ワッフル焼いたから、綾乃ちゃんの所と殿下の所に持つていつたんだ。そしたら、二人とも、当分、ワッフルは見たくないって言い出して そんなにおいしくない？」

「ううん？ おいしいよ？」

「そう…じゃ、どうして食べてられないんだ？」

「不思議だよねえ」

「本当に」

ワッフルをパク付くるシフェルを前に、水瀬はしきりに首を傾げ
続けていたという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8039z/>

ワッフルとホックとスカートと
2011年12月25日19時47分発行